



太田和 功一 著

# 信仰の 土台の 再確認



## 序文

再臨の土台の再臨

じくま

文

「存在の耐えられない軽さ」——これは、チェコの亡命作家ミラン・クンデラの作品の一つにつけられた題です。自分の存在の軽さという耐えがたいほどの“重荷”があるとすれば、自分の信仰や自分の救いが耐えがたいほど軽くて、不確かであると感じる“重荷”も存在します。どうしたら、イエス・キリストの救いが確かで、重いものとなるでしょうか。それは、聖書が示すイエス・キリストによる救いの全体像をはっきりと理解し、また聖書の示す人間の歴史の意味やゴールを十分に把握することからであるというのが、筆者の信じるところです。

この小冊子の内容のほとんどは、「信仰の土台の再確認——救いの全体像」と題する連続講演で語ったものです。今回、K G K主事の高木実さんが中心となり、その講演のテープを掘り起こしていただきました。講演の準備にあたって、唄野隆先生の『現代に生きる信仰』（すぐ書房）、また入船尊先生の『この大いなる福音のために』『続この大いなる福音のために』（いのちのことば社）を参考にしました。読者の方々が、これらの本を直接に読まれて、イエス・キリストの福音の大きさと重さにますます目が開かれることを願ってやみません。

聖書の示す人間の歴史の意味とゴールの把握の重要性について言及しましたが、それと同時に、これまでの人生の歩み、いわば自分の人生の歴史についても同じことが言えます。聖書に聞くことと、自分の人生の歴史を見つめることがなされるとき、福音のすばらしさに心が燃やされることでしょう。

1995年6月

太田和 功一



文 庫

信仰の土台の再確認

もくじ

序 文 ..... 1

第1章 人間の悲慘さはどうして起こるのか ..... 3

第2章 人間の最初の状態は..... 11

第3章 人間に与えられた使命 ..... 16

第4章 人間の罪 ..... 25

第5章 救い——どこから、どこへ ..... 32

第6章 救いの三つの側面 ..... 38

すでに救われ、今救われつつあり、やがて救われる

第7章 救いの全体像 ..... 42

編者あとがき ..... 51

頁 8 半 2001

一 世 味 田 太

# 第1章

## 人間の悲慘さは どうして 起こるのか

これから、「信仰の土台の再確認」ということを一つの大きなテーマとして、皆さんと共に学んでいきたいと願っています。このようなテーマを取り上げた背景には、実は2つの願いがあります。それは……

1. キリスト者として生きていく上で大切な、聖書に基づく歴史観を学びたい
2. 私たちの人生そのものを聖書に基づいて見ていきたい

という願いです。そして、これらのことを単なる知識としてではなく、信仰とのかかわりの中で見ていきたいと考えています。

### ●ウォーミング・アップ

それではまず、これからの学びのためのウォーミング・アップをしたいと思います。次のページに、8つの項目に分けて、それぞれ「 」部分がプランクになっている未完成の文章が示されています。その項目ごとにじっくりと思いをめぐらして、自分の考えを自分の言葉で表現して文章を完結させてください。ただし、クリスチャンとして模範的な内容を書こうとしないで、ぜひ本音の部分(できれば信仰を持つ前の考え方、あるいは信仰を持っていても、親・家庭・社会などの影響によって自然にしみついてしまっているようなところ)を、ありのまま表現してください。







分け前を譲らなければならない。」(2:21)といった述懐もあります。

このような、人生に対する虚無的な見方も、聖書の中には結構たくさん出てくるのです。

## 詩篇90篇——死の問題を考える

生きるうえで、死の問題を考えることは、すべての人にとって大変重要なことです。そこで今度は、死について語っている詩篇90篇を見ていきたいと思えます。詩篇90篇はよくお葬式で読まれますが、それはこの詩篇が死んだ人のためではなくて、むしろ家族や身近な友人などが、その愛する人の死を通して、生きることを真剣に考えるようになるのに適切だと考えられているからとされます。

### ●神の永遠性・普遍性(1～2節)

「主よ。あなたは代々にわたって私たちの住まいです。  
山々が生まれる前から、あなたが地と世界とを生み出す前から、  
まことに、とこしえからとこしえまであなたは神です。」(詩篇90:1～2)

「生まれて、生んで、死ぬ」……これが人生のすべてでしょうか。神というお方は「生まれて、生んで、死ぬ」というような存在ではなく、永遠のお方であることを、詩篇90篇の1、2節では告白しています。

### ●人間のはかなさ(3～6節)

「あなたは人をちりに帰らせて言われます。『人の子らよ、帰れ。』  
まことに、あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、  
夜回りのひとときのようなのです。  
あなたが人を押し流すと、彼らは眠りにおちます。  
朝、彼らは移ろう草のようです。  
朝は、花を咲かせているが、また移ろい、  
夕べには、しおれて枯れます。」(詩篇90:3～6)

詩篇90編は、創世記3章の講解であるとよく言われています。この詩人は、創世記3章をよく読んで瞑想し、そして自分の人生を深く考え始めたのでは

ないでしょうか。それほどこの詩篇は創世記3章と結びついているように思えます。特に3節のみことばは、創世記3章19節が背景になっています。

3節から6節では、1、2節で言われている神の永遠性とは対照的に、人間の一生とは本当に短くてつかの間のものであると言われています。そしてそれは、「夏草やつわものどもが夢のあと」という「奥の細道」の俳句にも表れている日本人の「無常感」とも似ていて、私たちにもピンとくるのではないのでしょうか。そこまでは日本人の私たちにも十分に理解できるどころです。ところが次の7節からは、またがらっと変わって聖書の世界なのです。

### ●唯一の造り主なる神のうちにある世界(7～9節)

「まことに、私たちはあなたの御怒りによって消えうせ、  
あなたの激しい憤りにおじ惑います。  
あなたは私たちの不義を御前に、  
私たちの秘めごとを御顔の光の中に置かれます。  
まことに、私たちのすべての日は  
あなたの激しい怒りの中に沈み行き、  
私たちは自分の齢をひと息のように終わらせます。」(詩篇90:7～9)

この7節から9節にかけては、唯一の造り主なる神のうちにある世界が述べられています。そして人生の無意味さ、はかなさはただの当たり前のことではなくて、それを神の目で自分の人生を見るとき、実は神の怒りの結果であるとの認識が与えられるのです。私たちの人生がむなししいのは、それが神の御前においては不義に満ちているからなのです。

### ●残るのは労苦とわざわい(10節)

「私たちの齢は70年。健やかであっても80年。  
しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。  
それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。」(詩篇90:10)

私たちの人生を振り返って残るのは、労苦とわざわいであると述べられています。



## ●人間の罪と神の聖さのギャップ(11節)

「だれが御怒りの力を知っているでしょう。

だれがあなたの激しい怒りを知っているでしょう。

その恐れにふさわしく。」(詩篇90:11)

この11節は、人間の罪と神の聖さのギャップの大きさ、そしてそれに対する神の怒りを、どうして人間に分かることができようかという問いです。実際、自分の罪がどれだけどうしようもないものであるのかは、本当の意味では私たちになかなか分からないのです。ですから、神がどれほど私たちに対して忍耐しておられるのかということも、なかなか分からないのです。

## ●正しい人生観(12節)

「それゆえ、私たちに

自分の日を正しく数えることを教えてください。

そうして私たちに知恵の心を得させてください。」(詩篇90:12)

これは、本当に正しい人生観を持って生きることができるようになってほしいという意味です。「自分の日を正しく数えること」とは、自分の人生が短いものであることを認めるということです。そして罪に満ちた人生は神の前に裁かれ虚無に服することを自覚し、それと同時に、神のあわれみを知った者として無意味に生きることがないようにさせてくださいとの願いの告白なのです。

人間は普通、過去のことをあまり覚えていないのではないのでしょうか。たとえ記憶していても表面的なことで、出来事の意味とか、経験したことの尊さの意味は、あまり理解していないものなのです。そしてそんなふうにして人生を送っていくと、何年経っても同じことの繰り返しで、一向に成長しません。同じ誤ちを何回も繰り返してしまうのです。このように、罪の下にある人間の人生というのは、意味を見出せないまま忘却のなかにスルスルと落ちていくようなものではないかと思うのです。自分の人生がバラバラで、全体としての意味が分からないという形で一生終わってしまうとしたら、恐ろしいことです。

そのような中で信仰を持つということは、虚無の人生から救われる可能性があるということです。しかし、たとえ信仰を持ったとしても、私たちが罪人であることに変わりはありません。しかも私たちの住んでいる世界は罪に満ち、神の望まれることとはかけ離れた生き方、考え方が渦をまいていきます。ですから、その中で段々と影響を受けてしまうという危険は十分にあることな

のです。だからこそ12節の願いが告白されているのです。

## ●虚無ではなく、確かなものに(17節)

「私たちの神、主のご慈悲が私たちの上にありますように。

そして、私たちの手のわざを確かなものにしてください。

どうか、私たちの手のわざを確かなものにしてください。」(詩篇90:17)

ここで語られているのは、私たちのすること、やっていることをむなしいからっぽの虚無なものではなく、確かなものにしてほしいとの願いです。意味のあるもの、永遠につながるものにしてほしいと祈っているのです。

人生のはかなさ、人の一生の短さ、神の怒りの下にある人生、生きる意味を失った人生といった厳しい現実を語っている詩篇90篇は、それでも絶望では終わりません。むしろその現実の中で、それだからこそ一生懸命に祈っている詩人の姿を私たちに示しているのです。

## 日本人の人生観

少し戻って、日本人の人生観、つまり詩篇90篇の3節から6節の世界だけで生きていくとどうなるか、ということについて考えてみたいと思います。

「どうして死ぬのだろう」とか「どうして人生にはこんなに悩みがつかないのだろうか」などという問いに対する日本人の考え方には、代表的なものとして次の3つが挙げられるのではないのでしょうか。

### 1. あきらめの境地

まず第一には、こういう考え方です。

「これが現実でこれ以上の現実などはない。だから、そこから逃れようとか、そういう人生を変えようとか、そういうことを考えること自体が問題を余計に大きくしている。だから悟りをもってあきらめて、その中に生きていこう。」

### 2. 悲慘は無知から 教育が解決

第二には、「この悲しさは人間の愚かさ、無知から来ているのだから、教育や自己訓練によって人を知的・精神的に高めていけば、その愚かさは無くなるのではないか。」という考え方です。



## 第2章

# 人間の最初の状態は…

さて、第1章では、今の人間の現実について、人生がいかに悲惨なものに満ちているか、そして詩篇90篇の詩人や伝道者の書の著者が言っているように、人生というものは最終的には非常にむなしのものであって、いろいろなことをしても、結局は虚無に服していくものであるということに触れて来ました。それでは次に、なぜそうってしまったのかについて考えなくてはなりません。それを考えるとき、神様がこの世界と人間を造られたときの最初の状態は果たしてどうだったのか、そしてさらにどうして今のよう現実になってしまったのかという原因、そしてその結果を学んでいくことが大切かと思われます。そうすれば、どうしたらそこからの回復の道があるのかということも分かってくるのではないのでしょうか。

### 創世記1章31節 「見よ、それは非常に良かった。」

創世記1章31節によると、神様の造られたものは、全部まとめて「非常に良かった。」と言われています。要するに、創造された当初は、この世の中に調和や平和、喜び、美しさや意味というものがあったということです。ところがそれが、今の現実を示すような状態に狂ってしまったのです。

何がどのように狂ってしまったのかを考えるには、まずその最初の状態はどうだったのか、何が起って狂ってしまったのか、その結果どういことが生じたのか、ということを理解することが大切だとすでに述べました。なぜなら、それを理解することによって、私たちの人生の見方(人生観)が分かってくるからです。

聖書に基づいた人生観・世界観を確立するのは、現代に生きるクリスチャン

これは、人間の歴史は段々と進歩しているのではないかというヒューマニズムの思想によるものです。もっとも、これは最近ではあまり流行していない考え方と言えるようです。なぜなら、人間の歴史は技術の面で進歩していても、心は少しも良くなっておらず、むしろ悪くなっているということが一目瞭然となってきたからです。

### 3. たたりだ!

第三番目は、日本の社会の中では非常に庶民的な考え方として浸透しているものです。それは「事故、病気、家庭不和、悲しみなどがあるのは、死者の霊、万物の霊のたたりだ。」という考え方です。

たとえば、「問題が絶えないのは、死んだご先祖様をお祭りしていないからだ。」とか「その土地の神様を祭らないで家を建てたからだ。」などと言うのです。こういう考え方だと、何とかして霊を静めなくてはならないということに一生懸命になってしまいます。

さて、人間の現実がどうしてこんなに苦しみや悲惨なことが多くてむなしなのか、どうして死が人間の人生を縛っているのかということに対して、聖書ははっきりとした解答を与えてくれるのです。



にとって大切なことではないでしょうか。それがなおざりにされていると、特に学生の場合で言えば、就職や結婚の問題などでこの世の考え方・価値観に流されてしまう危険性があります。

そういう意味において、以前、K GKの主事会で、学生たちのために聖書的な世界観を確立するのに手助けとなるような書物を出版する必要があるのではないか、ということが話し合われたことがあります。その結果として『現代に生きる信仰』(唄野隆著、すぐ書房)という本の出版が実現しました。この本には、人間は神様に「応答する者」として造られたと述べられています。

## 人間 「応答する者」

「応答する者」とは、誰かの呼びかけ、語りかけに対して答える者という意味です。「応答」を英語では“response”と言います。この言葉には「相手がどうあるかによってではなく、自分の決断で答える」というニュアンスが含まれています。

ところが日本語では、この「応答(response)」を「反応(reaction)」という意味でとらえてしまう傾向があります。「反応(reaction)」とは、ぶたれたら「痛い!!」と言いつつ返すような感情的な返答です。

様々な人間関係の中での問題は、余りにも「反応」のレベルのものが多くて、「応答」のレベルのものが少ないことが原因となっているのではないのでしょうか。これこそ罪人の現実の姿ではないかと思えます。

罪の中にいる人間は、自由がなくて「反応」に振りまわされています。たとえば、本能とか欲望、あるいは性的な欲求に対してもそうなってしまうのです。

ところが本来の人間は、そういうことに対して機械的に反応する者としてではなく、自由に決断して「応答」できる存在として造られていたのです。それが聖書で言う「神のかたち」に造られたということの一つの意味なのです。

## 本当の人間らしさとは

欲望に従ってやりたいことをやっていく……。それが人間らしい姿、自然な姿だというのが現代の風潮となっています。そしてそのような時代の考え方に、私たちクリスチャンも影響されやすいのです。

しかし聖書によれば、人間はもともと「神のかたち」に造られているのです。

機械的に反応する者ではなく、自分の責任のもとに自由に主体的に決断できる者として造られたのです。そうだとしたら、果たして何が本当の人間らしさなのかを考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

## 「神のかたち」とは、いったい何か

神様は、世界のすべてのものをお造りになった際、最後に人間を造られました。そして、そのときのことが創世記1章26、27節では次のように記されています。

「そして神は、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。』と仰せられた。

神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」(創世記1:26~27)

人間が、他の一切のものから区別される特徴は、創造者である神のかたちに造られていることにありと聖書は言っています。

「神のかたち」ということを現代的な言葉で表わすとすれば、「人格がある」ということになるかと思えます。ところが日本を含む東洋には、この「人格」という概念がもともと無い、あるいはあいまいだと言われています。特に日本では、「人格」という言葉が「個人」という意味になってしまいがちです。たとえば人格的な伝道(personal evangelism)という言葉が、日本では「個人伝道」と訳されてしまうのです。このように、「人格」という言葉の理解は、私たち日本人にとっては非常に難しいと言えるのではないのでしょうか。

そうは言っても、片や西洋でも、この「人格」という概念がどんどん無くなってきているというのもまた事実のようです。言葉自体は最初からあったけれども、その内容が無くなってきているようです。

日本では、最初から言葉も内容もなかったと言えそうです。ですから、キリスト教の本質は「神との人格的關係」であるなどとよく言われますが、それが日本人にとってはなかなかピンと来ないのです。せいぜい、1対1になって互いに向かい合う、という程度にしか受けとめることができないのではないのでしょうか。



## 神が「人格的」であるとは 人が「人格的」であるとは

聖書で言う、神が“人格的”であるとはどういうことかと言うと……

神は 1. 何ものにも依存しない自立した存在であって

2. また自由な存在として

3. 創造的な働きかけをなさる方である

と唄野隆先生は説明されています。

そしてさらに、その神の「かたち」に似せて造られた人間が「人格的」であるということは……

人は 1. 造り主なる神以外の何ものにも依存しない存在であり

2. 造り主なる神以外のすべてのものから自由な存在であり

3. 造り主なる神以外のすべてのものに創造的に働きかける

という意味になります。

このように、創造者である神がどういう方かということと、人が「人格的」であるとはどういうことなのかということ、この2つのことは非常に深く関係しています。ですから、創造者である神がどういう方であるかを理解することなしに、「人格」とは何かということ私たちが本当の意味で分かることはできないのです。

特に日本の文化の中では、「創造主なる神」という理解がありませんし、当然のことながら、その神がどのように人間に対しておられるのかということも分からないのですから、私たち日本人にとって「人格」ということを理解するのは、なおさら難しいことと言えそうです。

では西洋ではどうかと言うと、昔キリスト教国と言われたようなところでも、今では「創造主なる神」がいかなる方であるかということ、そしてこの神が人間をどのように取り扱っておられるかというような知識に関しては、ますます希薄になってきているようです。ですから、世界中のどこでも「神のかたち」、「人格」として造られている人間の本質については、分からなくなっているというのが全体的な傾向と言えそうです。

そんな状況の中で、創世記1章から2章、そして3章、もちろん聖書全体から、神がどういうお方かということを知れば知るほど、そして神が人にどのようにしておられるかということを知るほどに、「人格」とは何かが本当の意味で分かってくるのです。そして自分の中に、「神のかたち」として造られた者

という自覚と、その実体と意味というものがますます成長していくのです。

## 「いのちの息」

人間の本質が「神のかたち」に造られたということは、人間は「応答する者」と言い換えることができるとすでに述べました。

「応答する者」とは、神の呼びかけに答える者として造られているということです。単に「反応」する者ではないのです。機械や動物のように単に「反応」するのではなく、その呼びかけに対して自分で自由に答えていく者として造られているということです。

このことは、創世記2章7節の記録(どのように神が人を造られたのかという記録)の中に、1つの鍵があります。

「その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息

を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。」(創世記2:7)

神様から「いのちの息」を吹き込まれて、初めて人間は「生きる者」となったと言われています。これは、人が造られるプロセスの中で、神様が人間にだけ特別にしてくださったみわざです。

神様が「いのちの息」を吹き込んでくださったことで、神様は人間をご自身に近い関係にある者と見てくださり、その人間を「人格化」せしめてくださったのです。つまり、神様が「いのちの息」を吹き込まれるとき、人間は「人格」として生きることができ、神以外の何ものにも束縛されずに、自由に、神以外のすべてのものに積極的に(というより、むしろ創造的に)働きかけることができるようになるということです。

このようなことは、神の口から出る「いのちの息」によって可能となるのですが、そのように造られた人間にはどのような役割が与えられていたのかについては、次の章で考えたいと思います。



## 第3章

# 人間の使命

元インドネシア宣教師の入船尊先生は、著書『この大なる福音のために』（いのちのことば社）の中で、次の2点を指摘しておられます。

### 1. 何のために救われたのかということの大切さ

まず第一に、インドネシアなどではクリスチャンが堂々と生きているのに対して、日本ではそういうことが少々足りないのではないかということです。確かに、日本ではクリスチャンが少数派であるという問題はありますが、どうもそれだけではないように思えるのです。この世の中でクリスチャンが信仰を持って積極的に、しかも堂々と確信を持って生きていくことができない原因の1つとして、自分が何のために救われたのかがはっきり理解されていないという問題があるのではないのでしょうか。

確かに、人生のいろいろな悩み、問題、危機の中で神を求め、その中から自分の罪に目覚め、そして救いを受けるということは多くあることです。しかしさらに一歩進んで、何のために救われたのかということについては、いまだにはっきりと理解していない場合が多いのではないのでしょうか。救われてそれでおしまい（「おしまい」と言ってしまうと語弊があるかもしれませんが……）。

神様が私たちを罪から救ってくださり、今こうして生かして下さっているのは何のためかという救いの目的について、十分に教えられる必要があるのです。

### 2. 創造の目的と我々の救い

第二の点は、神様が世界を創造された目的と、私たちの救いがしっかりと結びつけられる必要があるということです。これは、第一の点と密接につながっている問題と言えます。

神様が世界を造られ、特に人間を「神のかたち」に造られた目的は何なのか、そして人間がこの世界でどういう使命を持って生きるように造られたのか。このことを理解すればするほど、救われた私たちは、神の当初の目的（つまり、創造されたときの世界と人間に対する神の御心）にかなった歩みをする事ができるように造り変えられていくのです。

こういう意味からも、第2章では、創世記から学びを始めていったのです。そこでは、人間は「神のかたち」に造られ、しかも「いのちの息」を吹き込まれて「生きる者」となったということを学びました。それはすなわち、人間が「神のかたち」としての特徴を十分に発揮して、神様から与えられた本来の使命をもって生きるためには、神からの「いのちの息」を吹き込まなければならないということです。それなくしては、人間はただ単に土地のちりて造られた者として、自然の法則の中（肉体的欲求など）に支配されている動物や物質と変わらないものとなってしまいます。

## 人間の使命

そのような者として造られた人間に与えられた使命とは一体何か。それについては、創世記1、2章の中でもすでに教えられています。たとえば、1章28節では次のように言われています。

「神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。

「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべの生き物を支配せよ。」（創世記1:28）

神様が人を「神のかたち」に造られた目的は、人間が神様に代わって、あるいは神様の働きをまかされて、この世界を治めていくことなのです。

### ● 名前をつける

そのような使命を与えられた人間が最初にしたことは、生き物に「名前をつける」ことでした。それは、創世記2章19節に次のように示されています。

「神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来ら



れた。人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。」

(創世記2:19)

「名前をつける」ということは、すべての生き物を支配する(治める)ことの始まりでした。

まず被造物の世界をよく観察し、違いを見出して、同じものを1つのグループにまとめて分類し、特徴を認めていき、そしてこの世界に秩序をつくっていききました。今で言えば、人間が科学的な働きをしたということになります。

### ●地を耕す

そして、「地を従えて、すべての生き物を支配せよ」という命令を与えられた人間は、具体的には「地を従えていく」ということのゆえに、2節15章に語られているように「地を耕す」ことをしました。

「神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。」(創世記2:15)

この「耕す」(cultivate)という言葉から、文化(culture)ということが出てきたと考えられています。

また「耕す」とは、神の造られた世界を、造られたままで崩れないようにじっと守っていくことではなく、むしろ成長・発展を促すということです。あるいは、潜在的なものを表面に引き出していくということです。

したがって、人間に与えられた使命は、神が造られたものをじっと守っていくことにあるのではなく、むしろそれを管理し、そこにある成長する力、発展していく潜在力を伸ばしていくことにあったわけです。そのような「創造的な働き」をするために、人間は造られたのです。

実は、現代の人間もそれをしてしています。人間が文化を持って文明を築いているということは、人間が絶えず被造物の世界に対して働きかけていることの結果と言えます。人間自身も被造物の1つですから、人間に対しても観察し、学んで、人間の中に秘められた様々なものを伸ばそうとしています。そして、世界にあるあらゆるものを、どんどん伸ばそうとしています。生物について、地球の資源について、環境について、宇宙について学び、そこにある様々なものを伸ばそうとしています。

こういう「創造的な働きかけ」ができること自体が、「神のかたち」に造られ

ている人間としての特徴であると言えるのです。

## 男と女・協力関係——ただひとりではなく

しかし、人間に与えられたそのような使命を果たしていくためには、「神のかたち」に造られた人間が、ただひとりでは何かをしていくのでは不十分であることも示されているのです。

創世記1章27節では、初めから男と女とが、人間として「神のかたち」に造られたことが示されています。ところが創世記2章では、さらに人間が造られた過程が描かれています。

まず、地のちりで人が造られ、「いのちの息」を吹き込まれたことが2章7節で語られています。そして、2章18節で次のように語られています。

「その後、神である主は仰せられた。『人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。』」(創世記2:18)

そしてさらに、アダムの後にエバ(女性)が彼の助け手として造られたことが、2章21節から22節にかけて語られています。

「そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。」(創世記2:21~22)

### ●助け手

エバが「助け手」として造られる以前、動物の中にはアダムにふさわしい「助け手」は見あたらなかったと、20節には書かれています。

「こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。」(創世記2:20)



創世記1章27節では、人間が「神のかたち」に造られ、男と女に造られたとされていますが、ある注解者によると、この人間の創造についての初めのところで、「神のかたち」として「男と女とに彼らを創造された」と述べられているのは、非常に大きな意味があるということです。なぜなら、もし2章の記事だけだとすると、「神のかたち」に造られていて人格を持ち、また神との人格的交わりを持つことができ、そしてこの地を治め、支配していく尊い存在は男だけで、女性はその助け手(助手)でしかない。ましてや、男のあばら骨から造られたのだから、女は「神のかたち」ではないと誤解してしまう余地があるからです。

事実、罪に毒されている人間の世界には、男尊女卑という考えがいろいろな形でたくさん存在しています。

ヘブル語では(英語でもそうですが)、「男」という言葉が人間を代表するものとして人間一般を表すのに使われているので、女性が何か一段低い、劣った存在のように誤解されがちです。しかし、それに対して聖書は、男も女も人間であって「神のかたち」に造られていると言っているのです。もともと、神が造られた存在においては、男と女の間に優劣をつけるような考え方はないのです。

それでは、「助け手」という聖書の表現はどうでしょうか。一段低い者に対して用いられる言葉なのでしょう。

実際、日本人の、特に男性のクリスチャンの場合、この「助け手」という言葉を誤解していることが多々あります。「助け手」という言葉を、「助手(helper)」というふうにとめてしまう傾向がどこかにあるのです。これが問題なのではないでしょうか。ヘルパーというと、ホームヘルパー(昔は、女中さんとか、メイドさんとか言っていました)というふうと考えてしまうのです。そこには、儒教的というか、日本の伝統的な男尊女卑の考え方がるように思います。確かに罪赦され、救われ、さらに献身した立派なクリスチャンであったとしても、このことに関しては、古き人が相変わらず生きているということがよくあるのです。

実は、「助け手」というときの「助け」という言葉は、「神は我が助け」(詩篇46:1)というときの「助け」なのです。

「神は私の助けである」と言うとき、それは「私のヘルパーである」という意味でしょうか。神様は、いわゆる一段低いところで、自分(私)のために一生懸命奉仕してくれる存在なのでしょう。もちろんそうではありません。

「自分にはできない。自分はもう行き詰まっている。もうダメだ。神様、助け

てください。神様、あなたは私の助け、悩めるときはいと近き助けです。」という、そういう「助け」である方に対して呼びかけている言葉なのです。

ですから、女性が「助け手」であるということは、男にはできないことをする存在として、女性が造られているということではないでしょうか。

確かに、男が先に造られたといういきさつから、女性が「助け手」ということになっています。しかし、人間として考えてみれば、両者ともお互いにとって「助け手」ということが言えるのではないのでしょうか。

### ●協力関係の中で使命を果たす

「神のかたち」に造られた女性が女性としての役割を果たしていくとき、男性の働きが助けられ、そして「神のかたち」に造られた男性が男性として与えられた使命を果たしていくとき、女性が必要とされていくのです。これは、単に夫婦関係だけではなく、広く人間の社会全体の中でも言えることではないでしょうか。

P. トゥルニエという人が、『女性であること』(ヨルダン社)という著書を書いています。この本のもともとの題名は『女性の使命』ですが、その題が示すように、女性に与えられた特有な使命は果たして何なのかということが語られています。もちろん、女性をテーマに取り上げているのですが、それでも男性こそ読まなければならない本ではないかとつくづく思われるのです。ぜひ男女を問わず、一度手に取って読まれることをお勧めします。

いずれにしても、「神のかたち」に造られた人間が、その与えられた使命を、この被造物の世界において果たしていくとき、それは決してひとりではないということです。もう一つの人格を持つ「神のかたち」に造られた人が、「助け手」として必要だということです。つまり人間は、人格的交わりを持ちながら、互いに助け合って、与えられた使命を果たしていくように造られているということです。

ですから、人と人との交わりは、単に自分の満足を得るため、あるいは淋しいからというのではなくて(もちろん、結果としてそういう面でも満たされることもあるのですが……)、むしろ互いに助け合って、神からの使命を達成していくためのものであるということです。

この創世記の記事では、まさしくアダムとエバの夫婦としてのつながりについて言われていますが、結婚についてもこういう視点が必要ではないかと思えます。要するに、神から与えられた使命のために互いに助け合う、そういう結婚を目指すということです。



## ●愛と信頼

「神のかたち」、「人格」を持つ者として、人と人が交わりを持ち、助け合っていくとき、そこには一体どんな特徴を見出すことができるのでしょうか。

「人格」の一番の特徴は、「自由である」ということです。そして、その人格的自由が一番よく表されているのは、愛と信頼という点においてです。強制されて愛するとか、強いられて信頼することは決してできないからです。人は自由に、自発的に愛し、そして信頼するものなのです。

ですから「人格的交わり」とは、まさしく「愛と信頼のつながり」であると言えます。

このことは、神様がアダムとエバを造られたときに、ただ単に結婚という関係の中での事としてではなく(もちろん、特に結婚に関する事として教えられているのは事実ですが……)、もっと広い意味で、社会を支えていくための根本原理が教えられていると理解することができます。

つまり、人間は社会を築いていき、そして人とのつながりの中で生きていく者として造られている……。その人間が社会を築いていくときの根本原理は、愛と信頼に基づいた自発的な協力関係にあるということなのです。そしてそれは、「神のかたち」に造られ、「いのちの息」を吹き込まれた人間には本来、可能なはずだったのです。

「家庭から社会が始まる」とよく言われますが、まず夫と妻の関係の中で、そして親子の関係の中で、さらに広がって社会全体へと社会(人間関係)が形成されていくにあたって、この自発的で自由な、愛と信頼に基づく信頼関係がそこにあるときに初めて、人間としての使命をこの地上で十分に果たしていくことになるのです。

## ●神との人格的關係

今述べたような、愛と信頼に基づいた協力関係の中で社会を築いていくことの根本においては、実は、神との人格的な関係が重要なのです。

## ●禁断の木の実

それでは、それは一体どこに見出せるかという、あの有名な禁断の木の実のところでは、

「神である主は、人に命じて仰せられた。『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。』」(創世記2:16~17)

ここでは、「神が造った世界は、すべて良かった。ところが、ただひとつだけ毒のある木の実を神様が造ってしまった。」と言っているわけでは決してありません。実は、この「善悪の知識の木からは取って食べてはならない。」という戒めを通して、神様は、人間が神との人格的な信頼関係(神を信じ、信頼していく関係)を深めていくことを願って、この木を造られたのです。

人間は一度「神を信じる」と言ったら、後はもう自動的にずっと信じ続けていくものでしょうか。

たとえば、実際の間人関係の中でも、男と女が結婚するときには誓約をします。「死に至るまで、健やかなときも、病めるときも、富めるときも、貧しいときも、どんなときにも節操をつくして、これを愛し、これを養い、忠誠を誓います。」という約束です。

ところが、そのときに一旦、心底からその約束をしたら、後はずっと自動的にそれが続くのかというと、必ずしもそうではないのです。むしろその後の試練や問題の中で、改めてもう一度、「この人を私の妻として(あるいは夫として)愛していく。」と繰り返し誓っていくことが大切なのです。

それと同じように、この「善悪の知識の木」を人が見るたびに、「神の戒めを守ろう。神様に信頼していこう。」という信頼に基づいた決断ができるように、その1つの機会として、神様はこの木を与えられたのです。つまり、神様に対する人格的關係、信仰と信頼という関係を深めていく機会として、この木を与えられていたのです。

## ●死

神様は、ただ単に「この木の実を食べてはいけない。」と言われたのではなく、「これを食べると、必ず死ぬ。」という警告を与えておられました。そして人が神の戒めにそむき、神様に逆らうとき、人は神との人格的關係を失ってしまい、本来的な意味において生きることができない者となってしまいました。実は、これが「死」というものなのです。







が崩れてしまうことがあります。

このようにして、最初に女が、続いて男が木の実を食べてしまいます(3:6)。要するに人は、神に対する不信の道を選んでしまったのです。

このようにして、罪がこの世界に入ってしまった。そしてそれは、単にアダムとエバが罪を犯したということにとどまらず、この2人から生まれてくる子孫であるすべての人類が、その時に罪を犯したということであり、また事実として、すべての人類は後にそのような罪を犯してきたのです。

こうして、死というものが人類を支配するようになったのです。ですから死は決して自然なものではなく、むしろ不自然なもので、神に対する人間の不服従、不従順、反逆の罪の結果としてこの世界に入ってきたものと言えます。

## 罪の結果

このように、罪の結果は死であるわけですが、しかしそれだけではなく、創世記3章には、そのことがさらに詳しく書かれています。

### 1. ありのままの自分を出せない

いくつかの結果の1つは3章7節です。サタンが言ったように、彼らが木の実を食べたら目が開けて素晴らしい知識・知恵を得たかという、実はそうではなくて、それは偽りだったのです。目が開かれて彼らが見たものは、自分たちが裸であるということだけでした。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。」(創世記3:7a)

それまでも裸だったのに、そのことを改めて知ったということは、単に肉体的なことだけではなくて、自分の姿はありのままではおかしいものだ、それを見られたら恥ずかしいという自己意識(いわゆる恥の意識)ができたということです。そして、いちじくの葉をつづり合わせて、自分の腰のおおいを作ったのは(3:7b)、単に裸だったから着るものを作ったということではないのです。

### 2. 神からの逃避

3章8節を見ると、彼らは神から逃避しています。

「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。」(創世記3:8)

かつては神に対する恐怖心は無かったのに、神を恐れる気持ちに満たされ、神から逃げて身を隠すようになりました。神との関係が壊れてしまったために、神から逃避しようとしているのです。

### 3. 責任転嫁——罪人の行動原理

さらに3章11節から13節を見ると、人間同志の関係も壊れてしまっていることが分かります。

「すると、仰せになった。『あなたが裸であることを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。』

人は言った。『あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。』

そこで、神である主は女に仰せられた。『あなたは、いったいなんということをしたのか。』女は答えた。『蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです。』(創世記3:11~13)

12節のアダムの言葉を見ると、もはや美しい愛と信頼の、人格的な自発的協力関係という交わりは無く、「あなたが私のそばに置かれたこの女が」……こいつが……という感じです。自分を守るためには何でもする、責任をなすりつける、そういう人間関係の崩壊がもうすでにここにあります。しかも、最も近い関係にあって「私の骨からの骨、私の肉からの肉。」(2:23)と叫んで、素晴らしいと喜んだ最愛の妻に対して、「この女が」……こいつが……と言って責任をなすりつけているのです。一方、女のほうも「蛇が私を惑わした」と言って、やはり責任転嫁をしています。ここに罪人の姿が示されています。何とかして自分を守らなくてはならない、という気持ちに取りつかれているのです。

神から何とかして逃げたい、そして自分を守るためには他の人に責任をなすりつける、これを唄野隆先生は「罪人の行動原理」と言っています。これは、私たちの生活の様々なところにあるのではないのでしょうか。また、自分の立場が危ういとき、私たちが思わずしてしまうのは、こういうことではないでしょ



うか。自分の責任を認め、その責任をとる、あるいははっきりと自分の過ちを認めて告白し謝罪するというよりも、何とかかんとか言って逃げまくり、逃げられなくなると責任転嫁するのです。これこそが、神との健全な関係を失ってしまった「罪人の行動原理」なのです。

#### 4. 親子関係

3章16節で、神様は女にこう言っておられます。

「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。  
あなたは、苦しんで子を産まなければならない。」(創世記3:16a)

1章28節で、神が人間を祝福して「生めよ。ふえよ。地を満たせ。」と言われたように、子どもを産むことは祝福でした。ところが罪によって神との関係が壊れたとき、今度は子どもを産むのに苦しみが伴うようになってしまったのです。

それは単に、出産の時の陣痛だけの問題ではないように思えます。親子関係の中に、罪の結果としての様々な問題が出てくるのが、すでにここで言われているのではないかと思います。

#### 5. 支配と隷属の関係

続いて3章16節後半。

「しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」  
(創世記3:16b)

ここで支配、そして支配される隷属という強制的な関係が生じてきます。今までは、愛と信頼に基づく自発的な関係が男と女の間に与えられていたのに、罪の結果として、強い者が弱い者を支配し、弱い者は強い者に隷属するという関係になってしまったのです。これこそ私たち人間の社会そのものではないでしょうか。

強い者が弱い者を支配する……。それは、ただ単に夫婦関係で夫が暴君となり、妻が忍従の生活をするというだけの問題ではなく、罪の中にある社会のすべての人間関係にまで影響していくこととなります。そして人間社会の秩序は、支配と隷属によってのみ維持されることとなります。

#### 6. 自然界への呪い

そして罪の結果は、ただ人間関係が壊れるだけではないことが、3章17節から19節でアダムに対して語られています。

「あなたが、妻の声に聞き従い、  
食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、  
土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。  
あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。  
土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、  
あなたは、野の草を食べなければならない。  
あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。  
あなたはそこから取られたのだから。  
あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」(創世記3:17~19)

自然との関係において「地を治めよ」と言われ、この被造物世界を支配する権威を与えられた人間の、その権威が通用しなくなったということです。自然(この被造物世界)が人間に反逆するようになったということです。人間が善かれと思って、いろいろなことに創造的に働きかけたり、この世界の中にある潜在力をどんどん汲み上げて発展成長させていったとしても、必ずそこには悪い副産物が出るようになってしまったということです。「土地は、……いばらとあざみを生えさせ」(3:18)という言葉に、そのことが象徴されています。

このように、人間の罪によって毒されてしまったこの世界では、良いことのためにする人間の営みによってすら、悪い副産物が生じないことはないというふうになってしまったのです。たとえば、効率を高めようとして組織を充実させて広げていくと、かえって人間は歯車ようになってしまい、働く喜びが段々と薄らいできてしまう。また、生活水準を高めるため一生懸命に経済成長、開発を進めていくと、いろいろな矛盾が出てきて余計に貧富の差が大きくなり、また環境が破壊され、汚染されていく。これらもすべて人間の罪の結果なのです。

人間が世界を治めていく力は依然としてあるのですが、それが、神の御心に従って神の栄光のためにではなく、人間の利益のため、自分の満足のために自然を利用するようになってしまっています。このように被造物世界だけでなく、人間さえも道具として利用しようとするのですから、ましてや自然に対しては、あらん限りの勝手なことをするわけです。それに対する自然の反逆が「い







## 第5章

# 救い ——どこから、どこへ

神様は、罪に落ちた人間を見捨ててしまうのではなく、罪に対する裁きの宣告の中にも希望を与えてくださっています。

### 備えられた悔い改めの道

創世記3章14節から15節の蛇に対する宣告の中で、特に15節。

「わたしは、おまえと女との間に、  
また、おまえの子孫と女の子孫との間に、  
敵意を置く。  
彼は、おまえの頭を踏み碎き、  
おまえは、彼のかかどにかみつく。」(創世記3:15)

これがある人は、一番最初の福音のメッセージであると解釈しています。ここでは、預言の形でボンヤリとではあっても、このような罪の結果の中に人間を引き入れたサタンに対する裁きがやがてあり、そして人間を罪の中にながらめ縛られているサタンの支配を打ち砕くお方が、人間の子孫として現われると言われています。聖書全体を通して見ると、これがイエス・キリストの救いの預言であることが、私たちにはよく理解できますが、この段階ではボンヤリとした預言という形で現われています。

このように神は、アダムに対して「もうダメだ!」と言っているのではなく、

悔い改めの道を備えておられるのです。神が私たちに求めておられるのは「悔い改め」です。人間の罪、そして神への不信のゆえに、私たちは神との関係を失ってしまったのですが、それを回復する道は「悔い改め」なのです。

3章の初めで人間が罪を犯したとき、神はそれを知らなかったわけではありません。神はまず園を歩き回られました。人間が悔い改める機会をとらえるようにと、わざわざ歩き回られたのです。

それでも人間が悔い改めないで、3章9節で「あなたは、どこにいるのか。」と呼びかけられました。そして11節でも神様は、「あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」と問いかけておられます。何度も人間に悔い改める機会を与えておられるのです。「もうダメだ! 見込みがない。」と言って追い出してしまうのではなく、そのような機会を与えておられるのです。

しかし、人間は渋々やっとなってきて、自己弁護をして、責任転嫁をしています。

### 「皮の衣」

神は人間をエデンの園から追い出しますが、その前に、3章21節を見ると「神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」とあります。

聖書の中で「皮の衣」を着た人は他に2人います。1人は旧約聖書に登場するエリヤで、もう1人が新約聖書に登場するバプテスマのヨハネです。そして彼らの「皮の衣」は、悔い改めを象徴しています。

皮の衣は、動物を殺して皮をはいで作ります。アダムとエバが「皮の衣」を着たということは、動物の血が流され、そしてその皮をはいで作ったものを着ているということです。それは、自分が罪人であって、血による贖いがなければ救われない者であること、つまり、後のキリストの十字架の死をいつも覚えているための視覚教材だったのです。これも、悔い改めの機会を与えるために神がなさったことでした。

聖書全体を通して、いつも罪人に対して神がなさるお取り扱いは、「悔い改めなさい」という招きです。これがいろいろな形でなされていて、旧約聖書を見ても新約聖書を見ても、基本的には変わりありません。神との関係の回復の道は「悔い改め」にあるのです。

そのように見ると、イエスが「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜ



## 罪の中にある人間の姿

創世記3章で言われているような「罪の結果」が、新約聖書ではどのように語られているのでしょうか。それは様々ですが、非常に短くまとめられていて、私たちの理解を助けてくれるみことばとして、テトス3章3節を挙げる事ができます。

「私達も以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快樂の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。」(テトス3:3)

罪の中にある人間の姿、神との交わりを失ってしまった人間の状態を、よくまとめているみことばではないでしょうか。

パウロは、「私達も」という言葉の中に自分自身も含め、テモテも、またユダヤ人も異邦人も、クリスチャンとなったすべての人を含めて、「私達も以前は」と言っているのです。そして、非常に悲観的なものとして描いています。クリスチャンになる以前の私たち人間の状態を、決して美しいものとしては描いていないのです。神に反逆してしまった人間の人間関係、あるいは個人の内面、罪の性質を持って生まれついた人間の実状を的確に示しています。それを3つに分けることができます。

### 1. 愚かで、不従順で、迷っている状態

いわゆる知力、知識という面では、人間はどんどん成長しているかもしれませんが。しかし、何が人間にとって根本的なことなのか、生きていくうえで大切なことは何なのかについては「愚か」になっています。

「不従順」についても、神に対する反発、反逆という性質が体にしみついてしまっています。そして神に対してだけでなく、人間に対してもそうなってしまっています。とにかく自己中心に、自分勝手な道を行きたいという性質があります。

そうかと言って、自分でしっかりと生きていけるかという、いつも「迷っている」のです。

「愚かさ」と「不従順」と「迷い」とが一組になっている……。人間はこのような状態にあるのです。これが聖書の言う「暗やみ」の中にある状態と言えるでしょう。

よ。」と福音宣教された意味が分かってきます。さらに復活したイエスが弟子たちに、「罪の赦しを得させる悔い改めが、……あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」(ルカ24:47)と言っておられ、ここでも「悔い改め」のメッセージが宣べ伝えられると語られていることにもうなずけます。

「福音」は、神が人間に最初から与えられたものであり、また人間がもともと持つことのできた神との人格的な深い関係に「戻るように」という、神からの絶え間ない「悔い改め」への呼びかけなのです。

## 使徒の働き 26章17、18節

これまで、どこから救われ、何のために救われたのかを理解するための土台として、創世記1章から3章にかけてざっと学んできました。

そこで今度は、使徒の働き26章17、18節を見てみましょう。これは、復活のイエス・キリストが教会を迫害したサウロ(パウロ)に現われたときに言われた言葉です。

「わたしは、この民と異邦人との中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。

それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。」

(使徒26:17~18)

まず、「彼らの目を開いて、暗やみから光に」移すために、パウロが遣わされました。言い換えれば、私たちが救われるということは、「暗やみから光に」移されることです。そして、「サタンの支配から神に立ち返る」ことです。また、イエスを信じる信仰によって、「罪の赦し」をいただくことです。さらに「聖なるものとされた人々の中であって」神の民に加えられ、「御国を受け継ぐ」ことができるようになるということです。

このように、ここでは「救い」に関して、どこから救われ、何のために救われたのかについて、具体的にいろいろ説明されています。それをさらに詳しく学んでいきたいと思えます。



## 2. 欲情と快樂の奴隷という状態

自由にいろいろなことをしているようでも、実際には、いろいろなものに縛られているのです。実は、少しも「自由ではない」のです。束縛され、自己中心的な欲望の奴隷となっているということです。

## 3. 悪意とねたみの中に生活し……互いに憎み合う状態

愚かで、不従順で、迷っており、そして「欲情と快樂の奴隷」という状態だからこそ、その結果として、人間関係の中では「悪意とねたみの中に生活」することになります。そして、お互いに対しては、憎み、憎まれるという状態になるのです。

## サタンの支配からの救い

愚かで、不従順で、迷っていて、そして「欲情と快樂の奴隷」となり、「悪意とねたみの中に生活し……互いに憎み合う」。これが、神との交わりを失ってしまい罪の中にいる人間の姿なのです。このように言うと、これが何か道徳的な問題であって、道徳的な教育をすとか、人生の知恵を教えてあげれば直るように思ってしまうかもしれませんが、実は決してそんなものではありません。もっと深刻なのです。

それは、エペソ2章1節から3節を読むと明らかになってきます。

「あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中であってこの世の流れに従い、空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている靈に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中であって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」(エペソ2:1~3)

ここにも「不従順」という言葉が2回出てきます。テトス3章のほうでは、「欲情と快樂の奴隷」とありますが、このエペソ2章でも「自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない」とあります。まさに欲望の中に生きているのです。

しかし、実はそれは単に道徳的な能力が低下したからというのではなく、2節にあるように「空中の權威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている靈に従って、歩んで」いたからだということです。実は、サタンがアダムとエバを誘惑して罪の中に引きずり込み、神に対する叛逆の罪を犯させ、それで終わったわけではありません。サタンはもう歴史の中から姿を消してしまったのではなく、それ以来ずっと働いていて、人間はその支配の力の中に置かれているということなのです。

これが聖書に示された人間の状態なのです。決して、単なる道徳的な問題や教育の問題で片づけられるようなものではなく、根本的には靈的な問題なのです。

ですから、「救い」と言ったとき、それは「罪からの救い」あるいは「罪の結果からの救い」ですが、そこにはさらに「サタンの支配からの救い」が含まれているのです。使徒の働き26章18節にも、「サタンの支配から神に立ち返らせ」とあります。さらに、「わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中であって御国を受け継がせるためである。」とされています。

そこで次に、この世に生きる私たちにとって、「救い」とはどのような意味があるのかについて考えてみましょう。そして、「サタンの支配」という問題と「御国(神の国)」の関係についても見ていきたいと思います。



## 第6章

# 救いの3つの側面 すでに救われ、 今、救われつつあり、 やがて救われる

### 「神の国」

「神の国」とは「神の支配」ということです。この「神の国」という言葉は、「救い」という非常に広い範囲にわたる意味内容をよくまとめている言葉と言えます。ですから、そのような視点も含めて「救い」とは何なのか、救われた者として生きるとはどういうことなのかを学んでいきたいと思えます。

普通、「救われていますか？」という質問に対する答えは、「はい」か「いいえ」だと思います。あるいは「よく分からない」という答えもあるかもしれません。ところが聖書を見ていくと、必ずしもそのどちらとも言えないような側面があります。それほど単純なものではないということです。

言うなれば、「救われているけれども、まだ救われていなくて、救われつつあり、そしてやがて救われる」というのが、聖書の語る「救い」と言えそうです。整理すると次のようになります。

1. 救いの時としては、すでに救われている
2. 今、救われつつある
3. やがて救われる

これは、キリストを信じ、救いに招き入れられたすべての人に言えることです。しかし、このような「救いの全体像」を理解しないで、1の部分だけしか理解

していないとしたら、様々な問題が出てくると言えます。

### 1. 救いの時としては、すでに救われている

「すでに救われている」ということは、他の言葉で言えば「義と認められる」ということであり、罪が赦され「神の子」とされているということです。

エペソ2章8節には、「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。」とあります。ここで言う「救われた」は過去形ですが、ただの過去形ではなく、現在にまで結果が及んでいる過去形と言うことができます。

私たちはかつて(何年前かに)イエス・キリストを信じたときに、すでに救われたと証しできるし、事実救われています。

「恵みのゆえに」とは、神の一方的な愛のゆえに御子を十字架につけて、私たちの代わりに裁いてくださった、その愛のゆえにということです。

そして、イエスが私の罪のために死んで、よみがえられたことを信じ、イエスを自分の罪からの救い主として本当に信じる。そのような「信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。」とはっきり言われています。さらに9節では、「行ないによるものではありません。だれも誇ることもないためです。」と言っています。

このように、私たちは罪の裁きから救われ、「神の子」とされているのです。そしてそれは、全く私たちの側の何かによってではなく、イエス・キリストの十字架の贖いとよみがえり(復活)によって完成された、神の側の救いのみわざに100パーセントかかっていることです。

私たちはただ、その救いのみわざを感謝して受け入れ、信じるだけで罪が赦され、義と認められ、「神の子」とされ、救われるのです。

このように、「すでに救われている」とは、罪の裁きからの赦し(自由)と、「神の子」とされるために罪から赦され、義と認められ、自由とされたということです。

### 2. 今、救われつつある

ところがピリピ2章12節では、「恐れおののいて自分の救いを達成してください。」とあります。すでに救われているのなら、そのように言う必要はないのではないかと考えてしまいます。しかし、ここでは「自分の救いを達成してください。」とされています。

「達成」とは、段々そこに近づいていくことを意味しています。

第一ペテロ2章2節では、「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、み



ことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と  
 言っています。これは、神のみことばを一生懸命慕い求め、学んで、飲んで、吸  
 収して、それによって救いの中に段々と成長していくということです。

そういう側面で救いを見ていくと、「今、救われつつある」と言えます。そし  
 て、そういう事柄を神学用語では「聖化」と言います。

「聖化」についてここで詳しく論じることはしませんが、この「聖化」に関し  
 ては、人間の側にも大いに貢献すべき領域と責任があります。とは言っても、  
 神の側に圧倒的なイニシアティブ(主導権)があるのはもちろんですが、人間  
 の側のわざと、神の側のみわざの両面の働きがあるということです。

第二コリント3章18節では、「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、  
 鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに  
 姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」と  
 あります。つまり、「御霊なる主の働きに」によって「主と同じかたちに姿を変  
 えられて行く」こと、それが「今、救われつつある」ということです。

罪が赦され、神の子とされ、神との交わりが回復するのは、信仰をもって神  
 を受け入れたときに瞬間的に起こる出来事であると言えます。しかしそれだ  
 けではなく、さらに神との交わりの中で、聖霊の働きによって段々と変えられ  
 ていき、「主と同じかたちに姿を変えられて行く」という側面が救いにはある  
 のです。「神のかたち」に造られた人間が、罪の結果、「神のかたち」を損なっ  
 てしまったのですが、それが回復されていくのです。そういう意味で、救いはど  
 んどん完成に向かい、回復のわざが徹底していきます。そして、これは「御霊な  
 る主の働きによる」ことなのです。

しかし、「御霊なる主の働きによる」と同時に、「御霊によって歩みなさい」  
 「みことばを慕い求めなさい。」「恐れおののいて、救いを達成しなさい。」とい  
 う勧めが、私たちには与えられていることも忘れてはなりません。私たちのわ  
 ざや努力が求められているのも事実なのです。

そして、それは私たちの力だけでできることではなく、御霊なる神が私たち  
 のうちに働いてくださるからこそできることなのです。ピリピ2章13節に「神  
 は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわ  
 せてくださるのです。」とある通りです。ですから、神が私たちの中に働いてく  
 ださいよう一生懸命に求めることが大切で、そのためにもみことばを熱心に  
 慕い求めて学んでいく姿勢が大切になります。

### 3. やがて救われる

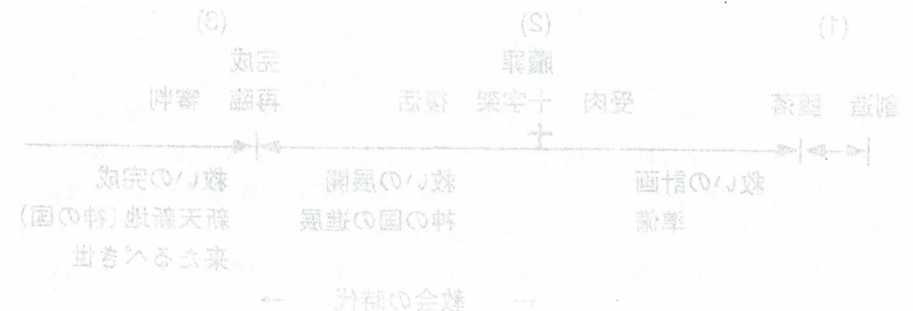
「やがて救われる」ということは、未来(将来)に関わる事柄です。第一ペテロ  
 1章5節には、「あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、  
 終わりのときに現わされるように用意されている救いをいただくのです。」と  
 あります。「救いをいただく」のは「終わりのとき」であって、そういう意味では、  
 「やがて救われる」ということです。そういう意味での救いはまだ受けていな  
 い、経験していないということです。

ところが面白いことに、このように言うておきながら、1章9節ではすでに  
 「救いを得ている」と言っています。つまり、やがて救われると言っておいて(1:  
 5)、しかもすでに救われていると言い(1:9)、さらに2章2節にいくと「成長し、  
 救いを得る」ために「純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。」と言っていま  
 す。

つまりクリスチャンは、すでに救われた者、そして今、救われつつある者、さ  
 らに、やがて救われる者なのです。

### 画情の心珠の軒

画情の心珠の軒は、主の御霊の働きによる救いの過程を示しています。





# 第7章

## 救いの全体像

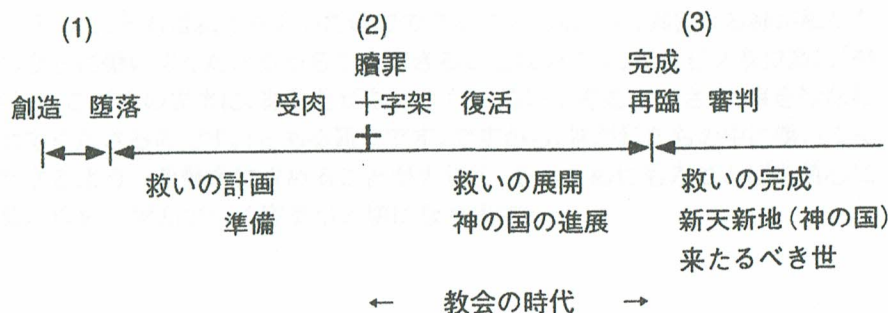
使徒の働き26章18節には次のようにあります。

「暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。」(使徒26:18)

「罪の赦し」とは義認のことです。罪が赦され、神の子とされ、すでに救われているということです。しかし、それで終わりというわけではありません。「救われた」のは、神の民の中にあって、神の民と共に「御国を受け継がせるためである。」と言っているのです。この「御国を受け継ぐ」ということが、やがて救われるということでもあります。

### 神の救いのご計画

神様の救いのご計画とは何かを考えると、下図のように歴史を3つの部分に分けることができます。



これまで学んできたように、創世記1、2章では神の創造の目的、その中で人間の役割、また人間と神との関係、人間同士の関係、人間と被造物世界との関係が、創造の当初どういふものであったのかが教えられています。

そして創世記3章では、人間として本来一番大切な、神に対する信頼と服従という面において誘惑を受け、人間は罪を犯して墮落してしまいました。その結果として、神との関係はもちろんのこと、人間同士の関係、人間の内面の問題、そして自分との関係においても歪みが生じ、疎外が生じてきました。そして、人間とこの被造物世界(自然)との関係にも問題が生じてきたのです。

しかし、神様はそのときに「もうダメだ!」ではなくて、そういう罪の中にある人間に対しても、創世記3章15節における蛇に対する宣告の中で、すでに救いのご計画を語っておられるのです。そして、さらに人間に皮衣を与えることによって、悔い改めへの道を開いておられます。

そして神様は、さらに罪の中に墮落してますます悪くなっていく人間に対して、ノアを選び、アブラハムを選び、そしてイスラエル民族を起こして、神の救いのご計画を着々と進めていかれます。

時至るに及んで、神の御子なるキリストが人間の姿をとって、この世に降ってこられました。そして、私たちの罪の身代りとなって十字架にかかり、神の裁きを受けてくださり、死んで、三日目によみがえって救いのみわざを完成してくださったのです。十字架による贖いのみわざが完成し、救いのご計画はここにおいて実現したと言えます。

### 神の国が近づいた

イエスの最初のメッセージは、「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」というものでした。「神の国は近づいた。」とは、サタンの支配につながれている人々を解放する神の支配(力)が、今まさに現われるのだ、だから神の国に入って、神の支配を受ける祝福にあずかるよというメッセージです。そのためには悔い改めて、福音を信じなさいということです。

罪の結果として、人間はただ道徳的に墮落してしまっただけではなく、サタンの支配下に置かれてしまいました。サタンの支配は神に対する不服従として現われ、人間を欲望の奴隷状態に縛りつけるということに現われます。そして、人間の力だけではそこから抜け出すことはできないのです。自分の力だけでは自分中心な欲望に打ち勝つことはできません。人間の力だけで神を信じ、



神の御心に従うこともできないのです。それはサタンが支配しているからです。

## 神の支配

使徒の働き26章18節で見たように、私たちが「やがて救われる」と言ったときの救いの完成は、「御国(神の国)を受け継ぐ」ということです。従って「救い」と「神の国」との関係について理解する必要があります。

「神の国」とは、一言で言うと「神の王としての支配」(神の統治)ということですが、あるいはもう1つの意味として、「神の支配の中に入る」ということです。

それでは、聖書の中でよく言われる「神の国に入る」とは、どういうことでしょうか。

「新しく生まれ変わらなければ、神の国を見ることができない。」

「幼子のように、神の国を受け入れなければ、神の国に入ることができない。」

というみことばがあります。「神の国に入る」とは、神を王として受け入れ、神に支配される状態になるということです。そしてそのようになる時、神の祝福を受けるようになるのです。

「救い」とは、サタンの支配から神の支配のもとに移されることです。そして、新しく生まれ変わり、罪を悔い改めてイエス・キリストを信じる……それはある意味で、もうすでに神の国に入っているということです。

パリサイ人がイエスに「神の国はどこに、いつ来るのか？」と質問したところ、イエスは、神の国はここにあるというような目に見える形で来るのではなく、「あなた方のただ中にある」のだと言われました。パウロも「神は、私たちが暗やみの压制から救い出して、愛する御子のご支配(キリストの国)の中に移してくださいました。」(コロサイ1:13)と言っています。

サタンの支配から神の支配(神の国)へと、私たちはすでに移されています。それと同時に、やがて救いの完成のとき(キリストが再び来られるとき)に、キリストを信じて救われた者として、「神の国」を受け継ぐことが許されています。そこで、完全な意味での「神の支配」を経験することが許されます。そのときこそ「神の国」は完全な形で現わされます。そして、今現在の段階ですでに「神

の国」の中にいる私たちは、やがて来る「神の国」を真剣に求めていくときとして、今の時代が与えられているのです。

## 神の国を求める

では、どのように「神の国」を求めるのでしょうか。主の祈りの中で「御国を来たらせ給え。」と祈るようにと、主は教えられました。これはどういう事でしょうか。私たちはまだ「神の国」に入っていないから、そう祈るように教えておられるのでしょうか。もちろんそうではありません。

すでに私たちは「神の国」に入られています。しかし神様の王としての支配が、私たちの生活の中に、あるいは私たちの交わりの中に、そして教会の中に、より現わされるようにとの願いが、この祈りには含まれているのです。古い肉の支配や罪の力の支配ではなくて、神の御心の支配がさらになされるようにとの願いが込められている祈りと言えます。

ということは、クリスチャンである私たち自身の中には、神の支配を受け入れ、従う力と同時に、それに反逆する力の両方があるということ。その間には激しい戦いがあるということです。それは、自分の内側だけにあるのではなく、教会の中にもあります。ましてや、世の中は神の支配に反逆する力で満ちていると言うことができます。だからこそ「御国を来たらせ給え。」と祈るのです。

この祈りは私たち一人一人の聖化、すなわち、よりキリストに似た者としてくださいという祈りでもあります。そして同時に宣教の祈りでもあります。神の支配を受け入れていない多くの人々が、サタンの支配から解放されて神の支配の中に入るようにとの祈りであり、そのために私を用いてくださいという祈りでもあります。そしてこのことは、やがてキリストが再び来られるときには「神の国」の実現として完全に現われるという、希望に満ちた祈りでもあります。

そういう意味でも「神の国」は、すでに救われ、今救われつつあり、やがて救われるということにつながっています。

そして「永遠のいのち」という言葉も、「神の国」や「救い」という言葉と同じ意味で使われています。聖書では、

「永遠のいのち」＝「神の国」＝「救い」

とすることができるといいます。従って、私たちはすでに「永遠のいのち」を受けていると同時に、まだ本当の意味での完全な「永遠のいのち」を経験してい



るわけではないのです。

それと同じように、「神の国」(神の完全な支配)をも、まだ完全には経験していないのです。

## 神の国の到来

しかし素晴らしいことには、「神の国」は今の私たちのただ中にあると、主は言われました。神は、今や人々をサタンの支配の束縛から解放して、ご自身の支配のもとに入れてくださっています。マタイ12章28節にある通りです。

「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」(マタイ12:28)

イエスがこの地上に來られて、悪霊どもを追い出しているということは、実はもう神の国が到来したしるしであると主は言われています。

確かに「神の国」の完成までには、厳しい戦いがあります。しかし、この戦いはすでに勝敗が決まっています。イエスが來られたこと、そして十字架と復活のみわざによって、サタンの敗北は決まっています。

ルカ10章17節以下を見ると、「主よ。あなたの御名を使うと、悪霊どもでさえ、私たちに服従します。」(17)と弟子たちが言うと、イエスは「わたしが見ていると、サタンが、いなずまのように天から落ちました。」(18)と答えています。もはやサタンの支配は地に落ちて、絶対的なものではないと言っているのです。

このように、もう私たちに対するサタンの支配は敗北が決まっています。すでに神の支配が与えられ、そしてやがて完全に確立するという確かな希望が与えられています。だからこそ、「神の国」の進展のために召された私たちは、自分の生活の中で神の支配がより確立することを求め、さらに教会を通して、神を王として信じる人々の交わりを通して、「神の国」のリアリティーがより現わされるよう求めていくべきなのです。

## 神の国の「しるし」

神の国の「しるし」とは何でしょうか。ローマ書14章17節には、次のようにあ

ります。

「なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。」(ローマ14:17)

ここでは「神の国」のしるしとして3つのことが言われています。

1. 義 (これは単に人間的に聖く正しいということではなく、神の御心にそったあり方です。)
2. 平和
3. 聖霊による喜び

これらのしるしは、個人の生活レベルで見てもいいし、教会の交わりで、人間関係で、さらに社会や国家という広いレベルで見てもいいでしょう。

神の国が進展するという事は、私個人の生活の中に(あるいは家庭や人間関係の中に)、このような「神の国」のしるしが現われ、増し加わっていくことです。そして教会の交わりの中に「神の国」のしるしが現われ、増し加わっていくことでもあります。また、この世の中に「神の国」が進展するという事は、罪を悔い改めてキリストを信じ、「神の国」を求めるようになる人がひとりでも多く増えていくということです。そして、彼らの生活に変化が生じて、「神の国」のしるしが現われるということです。

## 神の国の進展

私たちは、このような「神の国」をひとりひとり個人的に求めていくのではなく、教会として求めていくように、そして福音のメッセージを宣べ伝えるようにと、この時代に立てられているのです。つまり、「神の国」の進展は、教会の成長と密接につながっています。

必ずしも「教会」=「神の国」ではありません。しかし、教会を通して「神の国」はよりはっきりと現わされ、教会を通して「神の国」は広がっていきます。だから、この時代を「教会の時代」と呼ぶのです。

「神の国」は教会を通してこの世に働き、人々をサタンと罪の支配から解放し、神の主権のもとにある祝福にあずからせるよう招いています。そしてその働きは、サタンの主権と支配との戦いの中で行われます。

第一ペテロ書でも、エペソ書でも、「救い」とは何かは非常にはっきりと教え



られています。そして、救われた者としての生き方も教えられています。たとえばエペソ書では、初めのほうは「救い」に関することがほとんどです。4章からは生き方(生活倫理)が教えられ、最後にサタンとの戦いが出てきて、霊的な戦いに備えよと教えられています。(エペソ6:10~12)

それは人間に対する戦いではありません。そんなに甘いものではありません。「主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対する」戦いです。すなわち、私たちが救われたのは、サタンの支配から神の支配に立ち返らされ、解放されたということであり、さらに、サタンとの戦いに召されているということなのです。そして神は、サタンの働きを教会を通して打ち破り、「神の国」を進展させてくださるのです。だからこそ、私たちはやがて完全に救われるという望みがあるのです。

やがて神の民と共に「神の国」を受け継ぎ、天に用意されている救いをいただき、罪の力が完全に打ち破られる。罪に対する完全な勝利。サタンが完全に裁かれる。涙もなく、死もなく、悲しみもない「新天新地」。そういう完全な「神の国」は確実なのです。そして、私たちはこの世の闇の主権者サタンとの霊的な戦いの中にありますが、それに対する勝利もすでに確実なのです。だからこそ、今、さらに「神の国」を求めよとされているのです。

すでに神の国の中に入れられ、その喜びと祝福がどれほど豊かなものか味わっている私たちに対して、さらにその素晴らしさを味わい、人々に神の国に入るように宣べ伝えよと主は言われるのです。

このように、救いとは、単に個人的に信仰を持って善良な人間になるためではないのです。また、罪の結果の悩みから救われてよかったというものでもありません。もちろん、そういう面もあることは事実ですし、大切ではあるのですが……。救われて神の国に入れられた者として、神の国をひたすら待ち望み、神の国のために戦うことがさらに求められているのです。

「神の国」「神の支配」が私たちの上に実現(確立)していくということは、私たちの具体的な生活の中に「神の御心」が行われていくことです。ローマ書では、11章までは神の救いの計画、救いのみわざ、救いの意味について語られていますが、12章からは救われた者としての「生き方」が語られています。

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」

(ローマ12:1)

自分のからだ(生活全体)を「神に受け入れられる、聖い、生きた供え物」としてささげるということは、言い替えれば「神の国」(神の支配)を本当に求めている姿と言えるのではないのでしょうか。そしてそれは具体的には、12章2節で次のように言われています。

「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神の御心は何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」(ローマ12:2)

心が一新され、新しくされ、自分が変えられるのは、「神の御心」が何であるかをわきまえ知るためなのです。もちろん、「神の御心」は聖書の中に示されていますが、それを人間の知恵をもって読むのではなく、聖霊に抛りすがりながら読みます。聖霊によって私たちの理解力(理性)がどんどん聖められていき、新たにされ、心の一新によって「御心」を知っていくのです。そして「御心」に従った生き方をしていくのです。これがクリスチャンとしての基本であり、根本なのです。

さらにローマ書では、総論だけではなく各論も教えられています。たとえば、教会生活、交わり、個人生活、家庭生活、社会との関わり、国家との関係などの問題にもふれられています。このように、「神の御心」が私たちの生活の様々な部分にあてはめられ、実現されていくのです。ですから、私たちは自分の信仰生活、教会生活、そして生活全般をそういう視点で見えていく必要があります。聖書に教えられている生活上の具体的な戒めを、単なる道徳や倫理としてとらえるのではなく、「神の国」の支配が私たちの具体的な生活の中で実現されていくために、それに従うことが求められているのです。

## 最後のまとめ

最後のまとめをしたいと思います。イエスの宣教は「神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信ぜよ。」というものでした。そしてまた、「幼子のように受け入れる者でなければ、神の国に入ることはできない。」とも言われました。この神の国を、私たちが受け入れるよう求められているのです。人間の支配は強制的ですが、「神の国」の支配は強制的ではありません。「幼子のように受け入れる者でなければ、神の国に入ることはできない」のです。



「受け入れる」とは、自分の自由な決断で「受け入れます。どうぞ来てください。」と言わなくてはなりません。「神の国」は決して自動的に来ないのです。私たちの「受け入れる」という自由で主体的な決断が大変に重要になります。

創世記2章で見たように、神はアダムとエバに対して「この木から取って食べてはいけない。」と命じられ、彼らがその木を見るたびに自分の自由な決断で神に信頼し、従っていくようにされました。結果的には、人間は残念ながら罪を犯して墮落してしまいましたが、それでも神は人間を取り扱うときに、初めからその意志や決断を決して無視してはおられず、むしろ大いに重んじておられるのです。

だからこそ、「悔い改めよ。福音を信ぜよ。御国を求めよ。あなたのからだを神にささげよ。」という呼びかけがなされているのです。そして、そのような神の呼びかけに応答することによって、「神の国」は進展していくのです。

歴史の中で示されていく神の救いのご計画を考えると、やがて「神の国」は完全に実現します。そのような確信があればこそ、この世でどんな苦しみがあるろうと、覚悟して生きていけるのではないのでしょうか。

このことを私たちの個人的な救いということで見えていくと、私たちの救いもやがて完成し、「神の国」を完全に受け継ぐことができ、そしてそのときには第二コリント3章18節にあるように、私たちがキリストと同じ姿に完全に変わられるのです。

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」(コリントⅡ3:18)

これは確かな約束です。しかし、だからと言って、どうせそのようなものだから、いいかげんに生きてよいということにならないのは当然のことです。本当にそのような望みを持っている者はどう生きるべきか、ということも聖書ははっきりと教えているのです。キリストが聖くあられたように、自分も聖くあらうとするのです。その望みが確かであればこそ、その望みに動かされて、一生懸命にキリストと同じような者になろうとするのです。

救いの完成とはキリストと同じ姿になることですから、キリストと同じ心を自分が持つことができるように、御心を一生懸命に求めるのです。そのようにして自分の救いを達成しなさいと、聖書で言われているのです。

このブックレットの内容は、1985年11月9～10日、松見ヶ丘キリスト教会において、太田和功一IFES(国際福音主義学生連盟)東アジア地区主事が「信仰の土台の再確認—救いの全体像」と題して語られたものです。

1986年10月、軽井沢でのKKG 全国主事会において、「教育・訓練担当委員会」が水口主事、ジャン・ソーデル元主事、ハロルド・ネットランド元協力主事と私によって構成されました。その後の話し合いの中で、KKGに関わる学生の皆さんが、自分に与えられている救いに対して一面的あるいは断片的理解にとどまるのではなく、聖書全体に示されている救いの全体像を的確に把握し、その福音の豊かさ、確かさを確認することを手助けする読み物の必要性が確認されました。その結果として、このブックレットの出版が企画されたのですが、初版が出版されるに至ったのは、それから9年近い歳月を経た1995年のことでした。

3回に渡った連続講演の1回目を水口主事、2回目を私、そして3回目をジャン・ソーデル元主事がテープから掘り起こし、さらに文体などを統一するための書き直し、章の区切りや見出しをつけるなどの再編集作業を私が担当しました。ですから文章上の表現、文体等に関して、稚拙な点、不明瞭あるいは不適切な点などがありましたら、その責任はすべて私が負うべきものです。また初版出版までに長い年月がかかってしまったのは、ひとえに私個人の限られた能力と怠慢の故であったことを、これに関わった他の主事たちの名誉のためにも告白しなければなりません。

初版出版後、幸い多くの方々に読んでいただき、暫くして在庫も底をつきましたが、幾つかの不備な点も見つかり、そのままでは増刷できずに絶版状態が続きましたが、今、こうして本文の修正やレイアウトの改定も施し、表紙デザインも一新して再版するに至ったことを、心から感謝しています。

特に今回の再版にあたっては、校正のために登坂裕子姉の多大な御労があったことを覚え、ここに感謝いたします。

キリストにある救いの豊かさと確かさが、お一人お一人の心のうちに深く受けとめられ、その歩みのうちに結実するために、このブックレットが用いられますことを心から願いつつ……。

1999年5月

高木 実



# きんごの音韻

1995年7月31日初版第1刷発行  
 1999年5月31日第二版1刷発行  
 2002年6月20日第二版2刷発行

著者 太田和功  
 発行 キリスト者学生会  
 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル3階  
 電話 03-3294-6916  
 FAX 03-3294-6050

1995年7月31日初版第1刷発行  
 1999年5月31日第二版1刷発行  
 2002年6月20日第二版2刷発行

著者 太田和功  
 発行 キリスト者学生会  
 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル3階  
 電話 03-3294-6916  
 FAX 03-3294-6050

## 信仰の土台の再確認

1995年7月31日

実 木 高

